

「阿里能まン満雲枕」

タイトル	「阿里能まン満雲枕」
著者名	能 海 寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 28 号
ページ	76—86
発行年	2023.3.15
E-mail	Sekihou@haz away.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年
5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東
谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶
応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意
を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛
教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登
山による体力の練磨をなす。郷里にあつては
地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高
島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、
宗教家として釈迦直伝の大蔵經の經典を
求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中
であつたチベットへ求道のため身を挺し
仏教巡礼探検を实践した功績は偉大で有
言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓
を残す。その苦難の34年の生涯に「般若
心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など
四巻が著書として永遠に伝う。

甲第十二号

「阿里能まン満雲枕」

天頂山 山水法師作

○ 第壹 法相

見よ唯識のたとへにも
偏計は空なり依円は有
蛇とおもふは空なれと
依他起生は因縁乃
されと円成実性は

蛇縄麻乃ごとくにて
ありとは志らず縄をふみ
その体麻は有なるな里
諸法なるゆへ縄も仮有
真如の理体実有なり

【唯識(ゆいしき)】

個人、個人にとってのあらゆる諸存在が、唯(ただ)。八種類の識によって成り立っているという大乘仏教の見解の一つ。八種類の識とは、五種の感覚、意識、2層の無意識を指す。

○ 第二 華天

円融無碍の一乗に
とくは相対絶対は
水にあらざる浪ならば
浪をはなるる水ならば
水はすなはち浪なれば
浪はすなはち水なれば
されば此理を推すときは
花のちるのも色即是空
花のさくのも空即是色

有空特對中道と
有即空即中道と
志づまることをなすを得ず
動くことをもえざるべし
風ふく時は動くなり
風やむ時は静かなり
森羅万象みな志かり

【円融無碍(えんゆうむげ)】

すべての事物が完全にとけ合って、障りのないこと。

【森羅万象(しんらばんしょう)】

あらゆる現象、宇宙に存在する一切のもの。「森羅」は樹木が限りなく茂り並ぶことであり、「万象」は万物やあらゆる現象。

花もし真に有なるなら
花もし真に空ならば

ちりさることもなかるべし
ひらく道理もなかるべし

○ 第三 真如縁起

十方三世よろずもの
犬のワンワン猫のニャあ
真は真実如は如常
常住不変絶対の
離言うに志いてなつけたる
真如無相の静水に
忽然念起風おこり
差別の浪はたかまれ里
業転現にひきつづき
起業業繋とかさねきて
浄法薫の本覚を
みがかばついに法性の

松のこずえも浪音も
鬼も佛けもみな真如
差別をはなれ平等の
妙体なりを議をたつは
依言真如ともふすなり
無明顛倒忘想の
相対有相物心乃
三細六塵だんだんと
智相相続執取仮名
生死に流転いたすなり
もとより萬物そのふゆへ
真如のひかり得べきなり

【三細六塵(さんさいろくそ)】

自分たちの中を流れている三つの微細な妄念や執着と六つの粗大な執着のことです。「塵(そ)」は粗いという意味です。

親鸞聖人御傳歌

○ 第壹 俗姓

それ聖人の俗姓は
かみよとよべるころおいに
おほみかみよりおゝせにて

その名もふるきそのむかし
天にましますあまてらす
みまこににぎの御みこと

みづほの国をおさめんと
ともにつきそひくだられし
あまつ児屋根のみことより
みこへにむまれたまひける
やどりたまへるそのはじめ
菩薩のいらせたまふぞと
とつき満じてやすやすと
松若ぎみとなづけける

此地にくだりたまふ時
ななつの神のその一の
御氏さり志し藤原の
いともとふとき位ひなり
右手に松の枝もてる
ちちははともにみしゆへに
むまれたまひし幼名おば

○ 第二 出家

雲井にちかき方なれば
身にもあまれる方なれば
おんとし九歳の春のころ
まいりて得度こいたまふ
あすまでのばしたまわれと
一首のうたをよみたまひ

上につかへて栄耀は
興法利生の念ふかく
慈鎮和尚の御もとに
そのときひもはやくれければ
のたまひければこたへとて

【興法利生(こうぼうりしょう)】

「興隆仏法（仏教を盛んにすること）」、「利益衆生（民衆を救済すること）」の略語。

あすありと おもふころの あだざくら
夜の間にあらし ふかぬものかは

是非にこよいと御ねがひ
無明をてらすともしびの
こぼちたまいて改名を
出家の身とはなりたまふ

ありけるゆへにそのごとく
あかりのもとにくろがみを
範宴はんねん小納言の公

○ 六角堂

六角堂の観音に
さむきもさらにいといなく
いびきにゆめをむすぶころ
もしや人よりうたがわれ
あるゆへ毎夜かよふぞと
ひかへてそとに出てたまひ
比叡みねより四覚まり
松ふくあらし身にしみて
ころものそではしみわたり
一心こめての御祈願も
かへりも山路四里あまり
はやしののめのあけ鳥
間もなくまでに人なみを
ある夜のことに聖人に
招待ありて聖人は
木像きざみあそばして

百夜のあいだ山路も
よももしづまり人もはや
そろりとねやをいでたまひ
みやこをなじむこゝろまだ
人目をしのび足音も
つもれる雪をこぎわけて
くだりたまへるみちすがら
さむさもつよくいとおしや
氷はすそにさがりける
すめばおなじくまたもとの
枕におつきたまふころ
ひやきふとんのあたたまる
おくれたまはずおきたまふ
そばをあげんといふものの
祈願かけてはかなはじと
代理つかはしたまいしに

ふしぎや木像そばをめし
御親影とぞまふしける
祈念ありけるみしるしは
百夜まんずるあかつきに
ただしきすがたなくしまし

○ 信行両坐

聖人あるときのたまはく
浄土易行にいりしより
得たる我身のよろこびは
しかし一師のみおしえを
真実報土得生の
自他おなしくしりがたし
親友たるのほどおしり
御弟子参集せるみぎり
意趣をとひたく思ふぞと
大師聖人のたまはく
すなはち明日人々の
仰せ出されたまへぞと
聖人のたまひけるよふは
なさけあそばすことなれば
とひたまわれば御弟子たち
その意を得ざるごとくなり
信空上人信の坐に
つぎに御弟子蓮生は
何かや事のあるらんと
英名武雄をあらはせし
気風はいまにのこりいて
いそぎ善信御坊の
その時聖人こたへさせ
いづれにつかせたまふやと
信のみ坐をば信の坐に
これをかきのせたまいけり
みな自力の迷心に
ときに聖人信の坐に
ややしばらくて御師匠の
これもおなしく信の坐に
みなおどろかれたまひける

○ 流罪

他力易行の御みのりの
人は門前市をなす

いまにのこりてそばくい
身心ともにつくされて
むなしきことのあるべきや
六角洞の救世菩薩
まさしくおつげたまひける

聖道難行そしおきて
出離解脱の良因を
なによりまさる果報なり
あふくともがら多きなか
信心成したらんこと
ゆへにひとつは同窓の
かつは浮世のおもいでと
出言いたし面々の
のぞまれければその時に
その條もつともしかるべし
来臨ありけるそのときに
志かれは翌日集会にて
今日は信行両不退
どちらにつかせたまふぞと
三百餘人多けれど
干時聖人覚法印と
まいるべしとぞまふされき
遅散いたしつ来て見れば
むかしは須磨のたたかひに
熊谷次郎直実の
下駄もはきすて杖もなげ
御執筆なるはいかがぞと
信行両坐をわけたまふ
のたまひければさらば予
まいるべしとぞ申されき
あとにはさらにことばなく
執してなるかこたへなし
自名をあつけたまいける
大師聖人のたまはく
まいるべしとぞのたまへは

【信行両座(しんぎょうりょうざ)】

親鸞が法然の門下で学んでいた時に設けたという信不退、行不退の2つの座のこと。

請寺よりかみへ請願し
仰せ出されその上に
四国の土佐に聖人は
師弟東西両方に
聖人わかれをおしまれて

ついに念佛禁制と
大師源空聖人は
越後の国へ御流罪と
わかれたまへることとなり
一首のうたを詠ぜらる

会捨常離ありとはかねてしりしかど
昨日今日とはおもはざりしを

大師聖人返歌とて

わかれ路のほどははるかになりぬとも
こころはおなじ花のうてなぞ

【会者定離(えしゃじょうり)】

この世で出会った者には、必ず別れる時がくる運命にあること。この世や人生は無常であることのたとえ。

○ 安芸の国みつだきのうた

あきの山縣奥山奥に
刈尾の山の谷川は
岩間岩間をくぐりぬけ
一度おちてはひとやすみ
みたびでしたの青渕に
きりは谷間をうろうくぬ
せまりて出る川口は
あいまあいまを流れゆく
かかるみごときおとめをも
みちとてあるにあらざれば
しづけき山の谷川に
さみしくくらすみつだきや

人の知らない名所がござる
八幡村おぞ流れすぎ
けわしき岩のひたいより
また二度おちてひとやすみ
数百尺をまろびおつ
渕のまわりのけしきよく
十畳ほどの大岩の
その風雅なる愛らしさ
田舎のあわれかなしさよ
訪ふ人とてたへてなく
清き流れをたたひとり
嗚呼きよきかなみつだき

【みつだき】

広島県山県郡北広島町八幡の太田川上流の三段滝のこと。

○ 富士山宿夜

富士の嶺に ちりなき月を 見る人の ふく笛のねも 今は絶妙なる

○ 雑題

めもとはねあをうなばらをはるはるとなかむるここちたとへがもなし
谷にのみ山また山をこえのぼりみおうすけしきなにゝたとへん
旅里ののこれるあとを訪ふ毎にむかしわしのぶこころたのしや
錦きて岩間なかるゝ谷川のおつる瀧音をなにときくらん
すみわたる人里遠きみずうみのきしうつなみにこころすまして
上野なる紅葉ちりけりわが里のむかひの山に鹿や鳴くらん
鹿島浦はまにうちよす白浪やおちくる瀧とうたがわれける
登り得て谷かとおもふうたがひのかすみをはらす宮司湖の月
ひとり来てひとりでかへる身なるのに世わたりばかりひとりならずや
われはただひとりで山にすみたきも此世のぎりにひき出されけり

【富士山宿夜】

この歌は、明治24年8月13日に富士山登頂時に詠んだ歌。

うきつらきなきかなしみが多きなりやすくはゆかぬ世渡りのさま
世をいとひみやまの奥にただひとり虚空をのみてくらすたのしさ
任重く道遠くともつとめばやいつしかきしに達せざらまし
旅里のものすごきにもたのしきはここにやどる信の月かな
ことわりはしらずもみだをたのむ身はころえすきそたのしかりける
世の中はいかにことわりかわるともかわらぬものはみだのやくそく

夢の世に ゆめさめみれば あらたまの春

動く浪 うごかぬ月が 欠くごとくなり 鈴ヶ森にて
神になりたやほとけになりたよもや鬼にはなりやすまひ
人をむまれて信心なけにや人とむまれたかでもなひ
わがのりはわがのりはおんなわらべのうとうたはなすはなしをきくうちにあり
われひとりうてさし出して世をさらば世はやみのよとなるぞかなしき
みがくほと心にうつる天然の妙理をきわめ信にいたらん
年月におわれではやく事を終へころゆたかにとし月をまで
せわたりはきもちひとつが大事なりういもつらいもみなきもちなり
きもちによりてういもつらいも
友多く世間をひろくわたるこそたのしくもありまたおもしろや
水をのみうでひちまげてまくらとしみちのたのしみそのうちにあり
年々に年とところをあらためどおもふがままにならぬ世のなか

○ 観行

比叡山にてお学問
草のいほりにすみたまひ
夜をを日につぎ天台の
出離解脱の要をえず
まよひの雲のまだはれず
なみかぜさらにおさまらず
日々くりかへしまきかへし
未代下限の機にんふ
なにかわれわれ道俗に
ついに根本中堂の
あまた諸方の霊崛に

二十九年のそのあいだ
ほたるをあつめて雪をつみ
観念修行こらせしも
ころの月をすませども
ころにおこるむやくやの
釈迦一代の法門を
よませたまふもなかなか
みのりはさらに見あたらず
たやすきみのりあらずやと
本尊はじめそのほかの
真の知識をねがひける

【出離解脱(しゅつりげたつ)】

迷いの境地を離れて、悟りの境地にはいること。

○ 国民

うたへもろとも御刻の民よ
吉野のさくら富士のゆき
天の橋立松島や
みなわが国の宝なり
大和めぐりをなすときは
みかどはあづまみゆこにて
神の御代より十代八千代
民も八千代とさかへゆく

のほるひのもと伊勢の浦
枇杷のみづうみ厳島
箱根日光筑波山
京大阪の見物や
名所古跡はみちわたり
民をいたわりいつくしみ
すえのかえまでしろしめし
これをたとへは梅香を

桜の花ににほわせて
我が日の本の国民は
わが日の本の国民は

柳の枝にさかせたる
げにさいわひのものなるよ
げにさいわひのものぞなるぞ

○ 老梅

わが庭の老ひたる梅は
忘れねど時をたがへず
紅の八重の花びら
さきそろひそのそのうつくしさ
ほめざるはないもことわり
堪へしのぎ老ひのかれきと
みさをなるこころなき木と

いく世よりあるともさらに
年々の春をまちかね
うつくしく香んばせともに
たとへなく見る人毎に
あることぞ冬のさむさを
なりはつもなをかくまでの
おもふなよげに人のみち

○ 送友人変清国行遂鎌倉行

こころだに誠のあらばへだつともおなじ月をばともにながめん

○ 去東京 癸己夏

田夫野漢来東京所学唯是浮薄業天下丈夫豈不概真実求道誰帰郷

癸己=M26 年

甲午=M27 年

○ 中国内海帰帆 癸己夏

船進瀬戸群島内、天賜公園真絶景、夜半上申残月照、旅情懐旧又推来

○ 着郷 癸己夏

回顧出郷受数年、無事帰山是佛恩、人事皆変彼亦我、依然存旧古遊山、

○ 秋夜歎 癸己秋

丈夫決志堅如石、業若不成但有死、雖然入門脱笠風、日々痛胸送晩秋

○ 波佐 甲午元旦

銀色界中金色人、金銀相映迎賀春、茅屋変水晶宮殿、

○ 入蔵形見

遠き路に立たる俊の形見にはマコト(真言也信也至誠也)
のかげを月の鏡に遺し置くなりおイおいな心の雲を
吹きはらひ昼はひねもす夜もすがら伏したる枕の
寝さめにもはだの守りと思召かたときはなしたまいなめ

○ 英和混歌 東西西京遊曆中旧作

Buddhist Must study Erenew Your duty like mount
Story peak mount Heavenly top raint gives mercy
Light warm come, come yonder water is bitter Here water
is sweet come with clam cels givo water

ほたるこおい ほたるこおい
あっちの水はにがいぞ
こっちの水ああまいぞ
かいがらもってこい
ぶうのませよ

○ 妙理 27.2.17

天地陰陽離合理、人生男女相合氣、誰能得解造物妙、明哲為情闇亦宣

○ 道覚居士中陰ニ其子久太郎ノ心ヲ悼ム二首

法を聞く人を死ぬとはおもふなよ弥陀の御国へむまれこそすれ
なきあとをとふらふ毎にねがふべしちちのまします弥陀の御刻を

○ 洛陽女兒惜顔色

隅田の桜のいふ事にや	ねんねがおわれて花見にく
年は桜の十八にや	島田でやつして花見にく
また年たてば夫とともに	手に手をひきて花見にく
また年すぐれば年老ひて	嫁や孫子をつられてく
も少しするとそのひとは	いづこへゆきし見にもこぬ
あれはゆんべのあらしにて	ちりたる花にうづもれて
いまはあの世の人ときく	同じ花見の人はこぬ

○ 暴風雨大逮夜 明治27年11月27日夜

志いらをば 皆ふきとばす たい夜かな
大風で まいりの火をば 消しにけり
ひかるなる いきた気もなき 大たい夜

○ 讚聖天仁子征清之御意 明治28年1月16日

日昇東天照満野、寒裂闇霧蒙温明、誰知皇裔日帝仁、征暴文化布四海
四海布文化

自註、一字一句不可輕視、日者、日輪也、日光也、日德也、(明温)、日本也、
天照太神(日神)也、日本皇帝也、日本之光澤也、昇者、上也、陸起也、興墳也、
即位也、東者東方也、東洋也、東海也、日之出所也、天者、虛空也、不動也、
上方也、照者光出也、君臨也、満者、一切也、不偏也、一到也、充分也、又
満州也、清国也、満州出身之朝也、満州人民也、野者、荒原也、場所也、野蠻
未開也、列寒裂者、嚴酷、害毀、壕傷也、暴裂無道也、逆惡也、寒者冷凍也、
慘慄也、満州北清之寒也、冬籠也、開者夜間也、密室也、天命也、愚痴也、不
辨道理也、霧者、日昼猶開夜也、不辨口尺也、闇之形容也、蒙者、潤沢也、
沐浴恩德也、利德也、温者、暖氣也、慈悲、愛憐也、恩德也、仁政也、善治也、
明者昼間也、智慧也、道理也、以下之二句準之可知、此字句之義理至深可味是也、
任意之一言也、

○ 大佐山雪桜の観 3月4日

大佐山しげる枝木につもるゆき吉野の花とうたがわれける
雪霞吉野の山や大佐山見る人そ見ん花や雪やと
大佐山薬師山よりながむれば多武の峰より見氏吉野山

○ 御城山

あらしふく松のこずえの物音やむかしの風をのこす城山

○ 波佐川大橋

夕すぐみはだへすずしき波佐川の流れも清き大橋の上
ながれも清き

○ 八幡社大祭唐傘千本 3月4日

年々の八幡やしろの大祭は千本傘の神の伴人

○ 柏原山の月 3月4日

柏原山の端にはや月出でてすき歟かたにかへる里人

○ 浄蓮寺の鐘 3月4日

夕ぐれや大佐の矢のに鳴り響くかねに草木もなびくなるらん

○ 永昌寺閑静雅 3月5日

木魚の音のたへたへに群鳥のつどひさへずる山の辺の寺

○ 笠松の揺 3月5日

ふきおろす風わふくみて帰るらん笠松下る木引舩かな

○ 弔愛猫急死 3月6日

畜生も果報よ寺においそだち死して後にも弔くはる身は

○ 波佐開教

みわたせばいづくに道を開くべき山かづらにてとづ荒野かな

○ 偶意 6月23 日夕景

住めば都の山里や	すめばみやこのやまざとや
波佐郷かこむ四方山の	四期のながめに心をとめよ
吉野の山のかわりには	大佐の山の雪さくら
三笠の山はなくとても	柏原山の秋のつき
そのてらさるる里の人	ひびきに三度の食事には
水穂の国のたからなる	精けあけたる波佐の米
まんまにたきて身をばややない	よそ里過ぎぬ波佐川の
清き流れにさらされて	日々のはたらき夕仕舞
遥かに聞こゆる鐘の音は	天頂山に響くなり
聞くひといかかおもふらん	きく人如何思ふらむ

○ 都茂山科安楽寺 5月17日

奥津科こころ安きの安楽寺佛の法に養はる身は

【波佐八景】

明治 28 年に詠んだふるさと八
景の歌。

○ 開祖洞円三百回忌に 明治28年5月18日執行

しりたけれひらきし時は今日の日をけふはひらきしそのむかしをば

○ 高嶋之漁火及同島にて 28年7月24日

石見潟千浦に出る漁火をみわたしつくす高島の人
石見潟石見潟名も高島の島人は地方ながめて日を送る
うらうらに夜な夜な出る漁火わ見て夜をふかす島人や
石見潟あちらこちらを見わたせばどこへ行くやら帆かけ舟
石見潟名も高島の嶋かげに磯うつ浪に心くだきて
日の本のすべはなくとも君が民安く月日を送る嶋人
ありがたや月はいつも照すなり高島人も同じ詠め

【高島】

島根県益田市沖の離島。明治28年に能海寛が寺子屋(へき地)教育を行った場所。

○ 天頂山晚鐘 明治31年6月5日

薪とり田畑たがやす里人に入合つぐる村寺の鐘

○ 発情歌俗作 明治30年10月20日

冬の夜さむに門出て見れば 淋しき月がわたしをてらす
草木もおおる霜夜の気しき じっとまことが身にしみわたる

○ 全上

いつくをめでや行く水の 流れも清きせど川に
うつるふたりのをもかげは そこにかかれるをぼる月
てらすふたりのこころなり

能海寛は、明治30年秋に帰郷し、佐々木静子と見合い、婚約して同年12月末に二人で上京した。東京では、井の頭公園、上野、池上などで将来を語り合った。明治31年6月29日、寛は故郷で結婚式を挙げた。明治31年10月4日、西藏行のため故郷を後にした。

○ 全上

誰がかきさげしともし火の ほそぼそあかるうらざしき
かたらふひまのみじか夜に こころのたけをといかたり
すへのすへまでかはさじと ちぎりをむすぶ身の上は
朝顔日記のそれならむ 時節まつ外ぜひもなし

○ 全上 30年11月13日 12月4日

見ても見たいが吉野の桜 そばにかいをき詠めたや
はかない此の身は川ばたほたる 露のおかげで夜をあかす
もみじあみ分けわしや鳴鹿の こがれ鳴声きかせたい
雪の下なる常葉の緑 色をかわさで春をまつ

○ 全上 30年12月26日

こころゆたかに気も静岡の 大東館でたびまくら
ふたつならべてねておれば こそこそひきたるあひねずみ
菓子をひきひきうたうには 今宵一夜は浦島の
明けてくやしき玉手ばこ
つぎつぎに 身がかがみと なかだてて かわらぬむねを うつしあいみん
ぬしのこころと わたしのこころ うつすかがみに うそはない

○ 池上にとまる

さいた桜は向嶋	花の主とは手をとめて
新橋たつて大森に	さらに池上さしてゆく
明保の桜のながめには	羽田の海の鴛鴦が
こころ一つに身はふたつ	まことつくしの水あそび
はるはる見ゆる遠げしき	あの雲こゑて外国の
遠き旅路にたつわが身	今宵ふしどにひとつねは
しばしわかれのなごりをし	羽田の鴛鴦は池上の
嘉年にめをばさますらん	森の鳥はとくおきて
あさひさし込む明保の	あまどひきあけをき出でて
西と東にわかる身の	その行末ぞいじらしや

浮雲の たよりなき身の 行末に いづこの山に かかりはてなる
おも阿しき免をさま誌

【池上にとまる】

この歌は、明治31年4月12日、二人揃って池上に出かけた時の歌を詠んだものである。

天頂山 山水法師集

○ グレー氏碑文

土に枕し此下に	身をかくしたる若人は
富貴名利もまだしらず	学びの道も暗けれど
あわれ此世わ打すてて	あの世の人となりにつけり
仁恵ふかき人なれば	天もあわれみ報ひけり
憂き人見れば涙くも	濁りの友のありしとよ
これより外に此人乃	よしあしともになわ深く
たづねるよしも詮となし	魂已に天に帰し
後の望みわ抱きつつ	神に間近かしはべるなり

○ 四期法歌 土岐善静

法の御山の桜花	昔のままに白ふなり
道の枝折の跡と免て	悟りの峯の春を見よ
法の御山のほととぎす	昔のままに名のるなり
浮世は夢そみじかよと	驚きさます声を聞け
法の御山の秋の月	昔のままに照らすなり
御法の風に胸の雲	拂ひてまことの月をほ見よ
法の御山の白雪は	昔のままにつもるなり
身をも捨つる跡ふみて	深さ悟りの奥を見よ

○ 海軍離別の曲 スコットランド人原作

こんど此度国の為に	遠く離れて西にゆく
君と暫く袖分つ	国の為なら是非もなし
君も其身を大切に	またの逢ふ頼をまつばかり

○ 出船の歌

往くも帰るもワシャ白浪の風にまかせた此からだ

○ 雑曲

お前はまちまち蚊張の外蚊を喰はれ七つの鐘の鳴るまでも
こちやかまやせん
秋の夜はながいものとはまんまるな月見ぬ人のころかも
ふけてまでもこぬ人のをとづるものは年ばかり
数ふるゆびのねつお□□己しやてらされているわいな
新なる年の初めの注連かざり松と竹との色くらべ老木の桜
も若やぎて積れる雪の美しくさとけてうれしき初日の出(本調子)
島原 三十一年正月

人知れず深く積りし夜半の雪解て二人の初夢結ぶの神に宮川の廓のの
閨もる犬張子(二上り宮川町)
あら玉のたまの契りを青柳に掛たる謎の解てこそ思ひ
積れる雪のはだあはりさはりも有らぬ世や(二上り光斗町)

○ 涙

茶葉における露にこそ清けき月の影やどれ
己が眼に浮ぶ涙には人の無情ぞうつるなる

○ 田舎少女

我が隣の娘はお月様ではなけれども
年は十三丸顔で色が白うて愛嬌よし
草を摘まうと野に行けば鈴菜の花が鳥渡惚れて
黄色の蝶に身を変し前に後によちよちと

○ 発情歌

はかないこの身はかごの鳥せめてそら立つ鳥ならば
近くの森にすをあげてこがれなくこえきかせたい
さいの河原と主まつよさにこひしこひしにむねをつむ
己たしや奥山一重のさくら八重にさくきはさらにな
そこて苦労は所見のならいそわぬさきから苦労する
さびさに月をかがみと出て見れば君がすがたは雲ぞつつ免り

【解説】この『阿里能まん満雲枕』は、「甲第十二号」の符号が付けられている和歌集である。明治 26 年、哲学館修了後、鎌倉・二見に立ち寄り、友人らに西藏行の支援を要請し、帰郷した一連の行動。故郷にいて明治 28 年離島「高島」へ渡り、寺子屋教育も行った。明治 30 年 10 月に佐々木静子との婚約時代、静子と再び上京して、休日には、井の頭公園、不忍ヶ池、池上などで共に行動し西藏行を見据えた寛の一連の思考が和歌を通して読み取れる。また、ふるさと波佐八景などを、こよなく愛情をもって詠んでいる。正に、在りのままに自身の想いの文を詠み記している。能海の日記に記載していない行動記録を補完する資料でもある。(隅田記)